5.3 環境研のインターネット接続

久松 俊一
公益財団法人 環境科学技術研究所 前常務理事
現職：理事長アドバイザー

インターネットは今や種々の連絡に必要不可欠の存在であるとともに、環境研の PA 活動にとっても重要であり、今後の益々の充実が望まれるところである。本稿では、環境研におけるインターネット接続の事始めを記すこととする。

当時の大桃洋一郎所長に声を掛けていただき、環境研に席を置けることになったのは平成 9 年度であった。それまで、秋田大学医学部に属していたのだが、理学部の放射化学講座の出身ということで、環境放射能研究に携わっていたことから、学会などではよくお顔を合わせており、その縁で拾っていただいた次第である。環境動態研究部に入れていただいたが、全天候型人工気象実験施設は建設中で、環境動態研究部は生物影響研究部とともに本館の 2 階の大部屋に机があり、和気あいあいの雰囲気があった。

当時の環境研には常時接続のインターネットが届いておらず、インターネット接続が必要な場合には、各自が用意したモデムを電話線につないで行っていた。このモデムによる接続は速度も遅く、使い勝手も悪いものであった。所外との連絡の円滑化のためにインターネット常時接続が欲しい旨を具申すると、それならお前が案を作れということになり、二つ返事で引き受けたものの、予算は大変厳しかった。ワーキンググループを組織して、いかに経済的に繋ぐかを議論し、まずは、メールを中心とした通信ができることを目指した。

当時は、Windows 95 への変換が進みつつあるところではあったが、そもそも、各 PC がラン接続インターフェースを持っておらず､そのための拡張ボードを購入する必要まであった。一方、所内の一部の建屋では建屋内ランの整備が少しずつ行われていたが、建屋間を結ぶランは無かった。

種々の案を考えた結果、建屋間のラン接続は見送りとし、各建屋からそれぞれ ISDN でプロバイダーのサーバーまで接続することとなった。最近､ISDN の名前を聞くことは無いが、64 kbps のデジタル通信サービスである。速度が Mbps ではなく kbps であることに時代を感じさせるが、この案は承認され、ゴーサインをいただいた。

設備投資は最低限を旨としたため、ラン設備が確立されていなかった本館内のケーブル配線は自前で行うこととなり、天井裏のユーテリティスペースを這いまわることとなった。1、2 階は比較的楽だったが、3 階では電話線用と見られる細い管路に 10BASE-T のランケーブルを引き込むという荒業を打たざるを得ず、これが結構な重労働だった。仕事をこなしてくれた職員には感謝しかない。

この時のワーキンググループは情報システム委員会となり、その後も所内のインターネット接続等に関わっていくこととなる。大学からの移りたてが何とか接続まで持って行けたのは、当時、原研から出向していた職員の助けが大きかったことを記してお礼申し上げたい。